

KIBO NO NIJI きぼりの虹

冬号

発行所
北海道大学生協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218



フォトコンテスト応募作品
「朝の農学部」

主な記事紹介

- 三面 恐電研究でモンゴル留学 第2回
- 五面 SDGs 第7回
- 七面 大学文書館へ行く 第22回

北大の景観と言えは農場にそびえるポプラ並木が有名だ。近年では金葉祭で賑わうイチヨウ並木も存在感を放っている。ハルニレを中心としたメインストリートは、北海道マラソンのコースにもなっており、エルムの森と言われるだけあって、この風景こそが北大人の心象風景かも知れない。他にも中央ロウンや各部署の敷地にも多種多様な樹木があり、緑豊かなキャンパスを彩っている。

ところでこれらの樹木からは毎年多くの落ち葉が生まれる。枯れ枝や風倒木も出る。工事などで伐採される樹木もあるが、これらの枝や幹はどこへ行くか「存じだろ」か。部署の敷地分は除外されるかも知れないが、落ち葉は百年記念館北側の崖あたり、枝などは北キャンパスの旧スクールバス車庫前に集積されている。落ち葉は収容能力を超えると廃棄物として学外へ処分される。枝や幹は木質燃料として引き取って貰うとも聞くが、現状は山積み状態に見える。木質燃料に利用されるとは言え、費用をかけて燃やしてしまうと言うことはちよつともつたいないなあとと思ふ。

緑のゼロエミッション

そんな中、今年はある試みが行われた。場所は総合博物館中庭で、普段から中庭の管理をしている博物館ボランティアの「きたみてガーデン」の協力の下、北海道マラソン事務局との協働で行われた。100%キャンパスの落ち葉で作った腐葉土のみで育てた野菜を、マラソン前夜祭のレセプションに提供することが出来た。実質

ぶ跨道橋撤去工事の際に伐採された数百本の樹木の内、一部を製材して保管していた。この材の一部は北海道ワイン教育研究センターの寄付の返礼品で木箱として使用されたり、学内コンテストの記念の盾に利用された。板材の存在が知られてきたからだろうが、今年になって学生発のスタートアップで洋酒樽の製作に利用されたが、初の学外利用として北海道マラソン折り返し地点のモニュメントに利用され

緑溢れる豊かなキャンパスの蔭で

生物園フィールド科学センター
職員調整室 連携URA
嘱託調整室 林 忠一



Opinion!

最後に夢物語で言えは、いつかクランク像前のロータリーの植え込みが、巨大な炬として盛大なキャンプファイヤーが行える集いの場となり、木材資源を通した祭が出来たらと思う。また、木や落ち葉とは直接関係ないが、循環バスも馬車で運行出来たら良いなあとと思う。北大はそんな突飛とも思えることやSDGsとして取り組める、懐の大きい大学であって欲しいと心から思う。

2ヶ月程度の短期間のためバジルやシソなどの葉物が中心だったが、9月に入ってキユウリやトマト、食用ホオズキなどが収穫できた。これに倣ってか部署の落ち葉や雑草を堆肥化する活動が保健科学研究院で始まったと聞く。これとは別に3年前に石山通を挟んだ北方生物園フィールド科学センターの、札幌研究林とキャンパスを結

喜びを分かち合えるSDGsな取組
板材の利用は基本的には有償で提供する。それを原資に今後の伐採や製材費用に充てる。これは部局単位で出来る事では無い。北大キャンパスをひとつのフィールドとして考えていかなければ持続的には続かないし、部局任せではどうしても限界があるだろう。しかし落ち葉の腐葉土化はある程度部局でも出来ると思う。ゴミとして廃棄するのではなく菜園などを作って収穫の喜びを分かち合うというのも良いのではなからうか。そんなことが来年、北キャンパスの創成研究機構の整備中の中庭でも行われるかも知れない。こうした事例が増えいくことを願わずにはいられない。

さらに桑園地区に建設されたエア・ウオーター株式会社のエア・ウオーターの森のベンチとして大々的に使われた、その端材はチカホ空間で行われるサイエンスフュタにも活用されることだ。年明けにはキャンパスに置く椅子プロジェクトも始まるようだが、製材し保管する場所があれば伐採木の利用は可能なのだと思ふ。

北海道大学SDGs 加藤 悟
北海道文書館 井上 高聡
北海道文書館 井上 高聡
北海道文書館 井上 高聡

「全国教職員セミナー」に参加して

●セミナー概要と全体企画について

全国教職員セミナーが2024年8月30日(金)、31日(土)の2日間の日程で開催されました。当初は山形大学で開催予定でしたが、台風10号が強い勢力で日本に接近していたため、急遽オンラインに変更となりました。本セミナーでは全体テーマ「協同組合の原点に立ち返り大学生協を考える」のもと、初日は基調講演2件、報告5件が行われました。開催に先立ち、石川工業高等専門学校船戸慶輔先生より2024年1月1日に発生した能登半島地震における生協店舗への影響についてご報告されました。

基調講演では明治大学の髙研道先生が鶴岡生協(共立社)の目指した生協の在り方について、生協は地域の人々がグループとして活動でき、そこにつながっていれば何とかなるという安心感を与えられる場であると話されています。2件目の基調講演では、法政大学の伊丹謙太郎先生が社会的連帯経済を紹介され、今だけ、金だけ、自分だけという日本の世帯において、協同組合での連帯の考え方が重要であると話されました。

また、報告の講演では大学生協が新設された豊橋創造大学の朝元尊先生より大学生協の良さについて報告がありました。これまで他事業者ではお昼休みに食べ物が無い、教材が販売されない状況であったものの、大学生協によって対応できるようになり、学生生活の充実につながったと話されていました。

2日目には4つの分科会があり、「これからの大学生の読書―どうなの、どうする?」、「協同組合と大学生協の原点から『食と安全』を考える」、「昨今の国際情勢を踏まえた緊急企画」、「環境を守り防災を進める『頑健な』大学生協をめざして」というテーマのもとに行われました。当初は、「協同組合の聖地・鶴岡に学ぶ」という特別企画も5つ目の分科会として開催予定でしたが、オンライン開催に変更となったために中止となりました。

●分科会② 食と安全

2日目の分科会では「協同組合と大学生協の原点から『食と安全』を考える」に参加しました。名城大学の北見宏介先生が分科会企画趣旨について説明され、大学生協は食料供給のために発足したものの、食べ物に

不自由しない現在では食育啓発を行っていくことが重要であると話されていました。また、食べるとは学ぶことであるはずが、現在の混雑した食堂では食べることが学ばないことにつながっていないかと提起されていました。報告講演では、鹿児島大学の熊澤典良先生より食堂混雑情報システムSmartEについて紹介されました。このシステムによって食堂の混雑状況を確認して混雑を避けて利用できるようになっただけでなく、混雑の要因が分かるようになったそうです。SmartEは熊澤先生の研究室において生協と共同で開発され、大学生協ならではの協同の取組でした。

●分科会④ 環境・防災

本分科会では、富山大学の横畑泰志先生の趣旨説明と司会のもと、大学生協の環境活動と防災の取り組みを議論しました。

前半は、大学生協の環境活動へのコロナ禍の影響に関するアンケート調査結果を横畑先生が報告しました。20%がやや影響あり、15%が中程度の影響、23%が影響大、13%が非常に影響大と回答し、コロナ禍は大半の大学生協の環境活動に与えました。また、大規模生協ほど影響が大きくなる傾向が見られましたが、学生委員会がしっかり組織されていると環境活動が多様化し、コロナ禍の影響も小さくなるという興味深い指摘がありました。

後半は、石川高専生協の船戸理事長からの令和6年能登半島地震前後の災害対応に関する報告でした。発災から営業再開に至るまでが詳細に報告されましたが、今回の地震に至る過去の災害で関係者の意識が高まっていたり、高専と生協で災害時の総合協力協定を締結するなどした点が、今回の災害対応で有益であったとのことでした。

オンラインながらも生協購買店の魅力をご紹介いただくなど、山形大学生協のホスピタリティがあふれるセミナーでした。セミナーの運営企画だけでなく、急なオンライン開催への変更など、関係者の皆様には大変お世話になりました。次回の全国教職員セミナーは2026年に名城大学で開催予定です。

いじわるじいさん

『フイエ・ハイマート』(池澤夏樹著)は、難民たちの逃避行を辿る作品集だ。内乱や飢饉から生き延びる為、シリアなどから逃れる人々がいる。業者手配のトラックや船に揺られ、難路を歩く。命からがらの移動だった。著者は日本人も難民だったと、本書に満州の引揚者の章を加えた。昭和

20年の敗戦で、満州は日本の外地から外国に転じた。在住の日本人は職も家も失い、飢えや伝染病に苦しむ。引き揚げを待つ間に息絶える人も。引揚者の中に義母もいた。0歳の子を背負い、2人の幼子をつれて逃げた。背の子というのは夫のこと。難民は他人事ではないのだ。国連には、故郷を追われた人々の保護が目的の「難民条約」があり、1981年に日本も加入した。『ポーター』(佐々涼子著)に登場するあるイラン人は反政府活動に参加した為、帰国は死刑を意味するが難民認定されていない。「難民条約の加盟国だから来たが、受け入れる気がないなら日本は条約から脱退してほしい」と彼は言う。▼昨年度、日本の難民認定数は申請者の1割にも満たなかった。非認定者は就労が禁じられ、入管施設に収容される不安に脅えなければならぬ。義母から聞いた命からがらの日々が想起される。彼らはこの新年をどんな思いで迎えただろうか。(今日子)

恐竜研究でモンゴル留学

～第2回 ゴビ砂漠で恐竜発掘編～

北海道大学大学院理学院 自然史科学専攻 地球惑星システム科学講座
日本学術振興会 特別研究員DC2
博士2年 大藪 隼平



9月8日。モンゴルでの生活も早いもので3ヶ月が経った。モンゴル語で簡単な挨拶をしたり、数を数えたりできるくらいには慣れてきた。そして、弟子ができた。彼の名前はビルグンボルド君で、古生物学研究所に勤務している。彼も僕と同じく鎧竜類を研究しており、その縁で一緒に標本を観察したり、勉強したりしている。そんなこんなで日々過ごすうちに、発掘調査の前日になった。2週間ほどのゴビ砂漠での生活に備え、大型軍用トラックのKAMAZに食料や発掘道具をせっせと積んでいく(写真1)。調査人数が30人ほどいるので、その分荷物も多い。この発掘調査は、北海道大学総合博物館の小林快次教授(筆者の指導教員である)と古生物学研究所が共同で主導しており、筆者はその一員として参加させてもらっている。調査地は、アーリベクダクという、後期白亜紀の地層であるバインシレ層(約9千万年前)が露出している地域である。調査の目的はその地域の恐竜相の一端を解明することである。そのため、新たな恐竜化石を発見・発掘し、研究所に安全に持ち帰ることが調査のミッションとなるわけだ。この地域は様々な恐竜化石が見つかることが分かってきているので、期待大なのだ。



【写真1】KAMAZトラックに大量の荷物を積み込む



【写真2】ベースキャンプの様子。ここで食事や調査の準備をする。



【写真3】筆者とビルグンボルド君が腰の骨を掘り進める様子

丸二日の長い道中を経てアーリベクダクに到着した。みんなでベースキャンプ(写真2)を設営した後、早速化石探しに向かった。そんな簡単に化石なんて見つかるのか?と思われがちだが、意外と爪や歯、骨片のような小さい化石はポロポロと落ちていく。また、そのような骨片を辿っていくと、大きな骨の発見につながることもある。ビルグンボルド君と一緒に血眼になって探していると、地面から骨が飛び出しているのが見えた。少し掘り進めると地中につながっている。2人で慎重に掘り進めると、恐竜の腰の骨と思われる骨が出てきた(写真3)。ただ、思ったよりも骨が続いておらず、保存状態も悪かったために、泣く泣くこの骨はお蔵入りにした。なかなかうまくいかないのが現実である。

途中、予想外の大嵐に見舞われ、ベースキャンプが半壊するアクシデントに見舞われたが、なんとか調査を続けていた。みんなの疲労が見え始めた調査後半、首と尻尾の長い、巨大植食性恐竜である竜脚類の全身骨格が発見され、発掘作業が始まった(写真4)。筆者はその発掘とジャケット作成作業に参加した。ジャケットとは骨の入った母岩に、石膏に浸した麻布を巻きつけて固めた塊である。こうすることで、化石を壊さずに安全に持ち帰れるのだ。ジャケットを作成するためには、骨の周りを丁寧かつ大胆に深く掘り込む必要がある。この作業がかなりしんどいのである。砂漠特有の日照りの中、嵐のせいで湿った重い土砂をスコップでかきだし、硬い砂岩は削岩機でガンガン削っていく。細かいところはハンマーやタガネ、デンタルピックで慎重に削る。小林教授総指揮のもと、このような作業を1週間ほど行い、大小13個のジャケットができた。気づけば燃えるような夕焼けに包まれていて、お腹も空いていた。心地良い疲労感と充実感を感じながら、すぐにキャンプ地に戻り最後の晩餐を楽しんだ。ぐっすり寝た翌日の朝、荷物を全て片付けてウランバートルへと出発した。いざ調査が終わると少し寂しい。不思議である。

このように、恐竜研究には多大なる準備と労力と予算が注ぎ込まれる。我々が博物館等で見られる化石も、もとは大変な過程を踏んでいるのだ。発掘の経験をする、恐竜の標本を研究させてもらえるのは本当にありがたいことだし、当たり前じゃないなと思う。こうしたみんなの努力と情熱を背負って、僕は今日も化石と向き合う。

(次号に続く)



【写真4】竜脚類の発掘現場。肩の骨と筆者がほぼ同じサイズである。

食堂メニュー「非組合員割増価格」設定のお知らせ

2025年3月3日(月)(函館キャンパスは2月3日(月))より、食堂メニューの「非組合員割増価格(2割増)」設定を実施します。

生協は加入してご利用いただくお店です。出資し、組合員のみなさまが加入メリットを感じられるように、またより多くのみなさんに生協への加入をお願いしたく、この度「非組合員割増価格」の設定をおこないました。

「組合員価格でご利用」には、組合員証のご提示をお願いします。ご提示がない場合は「非組合員割増価格」でのご提供となります。

組合員価格で利用するには？

- ・生協電子マネー、ミールプランでのご利用
もしくは
- ・組合員証をご提示
(現金・その他の決済のご利用の場合)

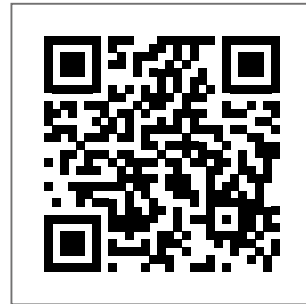
組合員の提示方法



組合員かどうか確認したい場合は？

下記のお問い合わせフォーム、
またはクラーク会館共済センターへ
お問い合わせください。

<https://forms.office.com/r/Vkiauw5kraR>



アプリで組合員証が提示できない場合(スマートフォンを利用していない場合)は？

カード式の組合員証を発行いたします。
お手数料をおかけしますが、クラーク会館共済センター迄お越しください。

組合員証を忘れた場合の料金はどのようになりますか？

非組合員価格でのご利用となります。
差額の返金は受け付けておりませんので、必ず組合員証をお持ちください。

組合員なるにはどうしたら良いですか？

下記受付店舗で出資金をお支払いただき、加入フォームをご案内いたします。
必要事項をご記入いただき加入となります。

受付店舗

工学部購買、医学部購買、保健購買、歯学部購買、薬学部購買、
農学部購買、文系ミニショップ、理学ミニショップ、ポプラ店、
北部トラベルセンター、共済センター

SDGs 連載 第7回

「北海道大学サステナビリティ宣言」

北海道大学SDGs事業推進部門 教授 加藤 悟



前回のoptimismの続きから。アメリカの大統領選挙でトランプ氏に敗北後のカマラ・ハリス氏の演説でもこの単語が効果的に使用された。演説の最後にキング牧師の"Only when it is dark enough can you see the stars." (暗いときにしか星は見えない) を引用した後、Let us fill the sky with the light of a brilliant, brilliant billion stars, the light of optimism, of faith, of truth and service. (私たちは、燦然と輝く10億の星の光、楽観主義の光、信仰の光、真実の光、そして奉仕の光で空を埋め尽くそう。(DeepL翻訳による)) と語った。

このoptimismを「前向きな」と訳出しているサイトもあった。faithも「誠実な」という感覚に近いと思う。気候変動対策は1992年に国連で枠組み条約が採択されてから32年も経過しているにもかかわらず、確実に対策が進んでいるとは言えない。だからといって今までの取り組みや現在の取り組みが全く意味がないものではない。悲観することなく、前向きに、今できることに野心的に取り組んでいきたい。

さて、2024年8月1日に「北海道大学サステナビリティ宣言」を発出した。いくつかの企業は自らのSDGsに対する取り組みをアピールし、銀行や投資家からの資金調達を有利にするためにSDGs宣言を出している。またいくつかの自治体はSDGs未来都市の指定を受けることと連動してSDGs宣言を出している。これらはSDGsに示されたゴールやターゲットに対して、自らの組織がどのように取り組んでいるかを宣言するものである。しかし、北海道大学のサステナビリティ宣言はこれらとは異なる。

国連のSDGsについては、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の構成要素に過ぎず、重要なのは前文などに書かれた理念や世界観であることは以前説明した。その世界観は、「より大きな自由の追求」「協同的なパートナーシップ」「誰一人取り残さない」「ウェルビーイング」「経済・社会・環境の調和」であり、それを世界で共有することに意味があると説明した。

北海道大学サステナビリティ宣言での世界観は、「学生、教職員、経営層も含めた全ての構成員を対象」、「各自が矜持と尊厳をもって活動する」、「自らの可能性へ挑戦するなど個々の能力を最大限に発揮する」、「学内外エンゲージメント（一体感と共感）」「誠実さと公平性などの倫理観」である。

「2030アジェンダ」を意識して作成したので符合するのは当たり前ではあるが、国際社会でも十分に胸を張ることのできる宣言である。しかもこれらは、北海道大学が創基以来大切にしている「フロンティア精神（→自らの可能性への挑戦）」「国際性の涵養（→エンゲージメント）」「全人教育（→矜持と尊厳を持つ、誠実さと公平性）」「実学の重視（→すべての構成員）」ともつながるものが多い。

約150年も前から大切にしてきた北海道大学のDNAを、2015年に採択された国連の「2030アジェンダ」の文書を受けて、2024年に「北海道サステナビリティ宣言」という目に見えるかたちで、大学の内外に示すことができたことがうれしい。北海道大学という独特な歴史をもとに書かれた「北海道サステナビリティ宣言」を、一人でも多くの人に読んでもらいたいと思っている。

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/declaration/>



クラーク書籍便り Vol.21

クラーク10月一般書ランキング

2位『歴史学は～』は教科書採用以外でも売れています。4位『まったく新しいアカデミック～』は人文系論文を独学で書くためのバイブルで全国的なベストセラーに。7位『学力喪失』、8位『崩壊する～』など広く教育を考える新書新刊も好調です。

書名	著者名	出版社	書名	著者名	出版社
1 TOEIC L&R TEST 出る単特急金のフレーズ	TEX加藤	朝日新聞出版	6 生成AI時代の言語論	大澤真幸	左右社
2 歴史学はこう考える	松沢裕作	筑摩書房	7 学力喪失	今井むつみ	岩波書店
3 はじめて受けるTOEIC L&R テスト全パート完全攻略	小石裕子	アルク(品川区)	8 崩壊する日本の公教育	鈴木大裕	集英社
4 まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書	阿部幸大	光文社	9 加耶／任那 古代朝鮮に倭の拠点があったか	仁藤敦史	中央公論新社
5 つながるアイヌ考古学	関根達人	新泉社	10 戦友会狂騒曲	遠藤美幸	地平社

心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院 准教授

渡邊 誠



何か困ったことがある時、いや、そうでもなくとも、私たちはお互いに支え合っていて生きていくわけです。しばらく前の新型コロナウイルスウィルス感染症の大流行は、そのことを教える出来事でした。対面の対人接触を大幅に制限せざるを得なくなり、ほぼ家族以外の人との接触が無くなってしまったというのが、二〇二〇年初頭から数年の状況だったわけ。とくにこの年の春に大学に入学して、家族のもとを離れて一人暮らしを始めた人たちの多くにとつて、来る日も来る日も一人パソコンに向かって授業を受けるという生活は、骨身にしみてつらかったのではないのでしょうか。今、沢山の人でにぎわう街を見ていると、早くも忘れられかけている遠い日々のごともうにも感じますが。

とくに一緒に何をすることもなく、ただその人がそこにいるということの、支える力。これは、人が人を支える基本というべきかもしれません。大災害が起きた時、人が家族のもとに向かおうとするのは普遍的な現象だと、災害心理学は教えます。東日本大震災の四日後に出張で東京に行ったら、電車の中のあちこちで、震災の日に交通網がマヒした街を何時間も歩いて家に帰ったという話が、交わされていたのです。

人を支えようとする時、積極的に相手の役に立つことをしたい。これは当然の思いでしょう。しかし、これは少し見方を変えると、目に見えるかたちで役に立ちたい、役に立つということになると思います。この「手ごたえ」ということは、とても大切で、これなしに支え続けるということは、かなり難しい。

ところで、積極的な心理療法に、その中で自分で出来る対処を学んでもらって治療終了後もそれを続けてもらうことで再発を予防する、という方法があるのですが、効果を持続させているのは、実は治療者と支援を受ける人との濃密な協力関係の経験である、とする

こころの健康を考える 87

マイナスのことばは、いい支え方

説があります。具体的に何かをしたという目に見えることよりも、人とのつながりの経験がその人を支え続ける、ということかと思えます。

私たちが、苦しむ人に対してよかれと思つてすることの多くは、常識に根差しています。でも常識は、必ずしも正しいとは限りません。そもそも苦しむ人の傍らにいたいということ自体が大変なことでもありますから、私たちは知らず知らずのうちに自分自身の大変さをやわらげようとする言動を取ってしまうことがあつても、不思議ではありません。近しい人を亡くした人に周囲がかける言葉のうち、何が役に立って何が役に立たないかを当事者に調査するという研究が、埼玉医科大学精神腫瘍科で行われました。驚くことに、八割は有害です。様々なアドバイス、「気持ちがいいわかる」と言うこと、「いつまでも悲しまないで」と言うこと……どれもマイナスでした。無害なのは、「大変でしたね」という言葉くらい、という結果です。相手に対して誠実な関心を持ち、その人が気持ちを表すことができる配慮を行い、そして、そばにいたい。これが近親者を亡くした人の役に立つ、具体的な振舞いであるという結論です。

では、なかなか手ごたえの持てない支え方を続けるには、どうしたらよいのでしょうか。誰かに認められることが必要だと思います。支えを必要とするご本人からの感謝の類は、数年後というような場合も多いようです。支える人どうして支え合ひ、認め合ひるといいのではないかと思います。

人が人を支えるということにおいても、実は一番大切なものは目に見えない(サン||テグジュペリ『星の王子さま』)のかもしれない

説があります。具体的に何かをしたという目に見えることよりも、人とのつながりの経験がその人を支え続ける、ということかと思えます。

私たちが、苦しむ人に対してよかれと思つてすることの多くは、常識に根差しています。でも常識は、必ずしも正しいとは限りません。そもそも苦しむ人の傍らにいたいということ自体が大変なことでもありますから、私たちは知らず知らずのうちに自分自身の大変さをやわらげようとする言動を取ってしまうことがあつても、不思議ではありません。近しい人を亡くした人に周囲がかける言葉のうち、何が役に立って何が役に立たないかを当事者に調査するという研究が、埼玉医科大学精神腫瘍科で行われました。驚くことに、八割は有害です。様々なアドバイス、「気持ちがいいわかる」と言うこと、「いつまでも悲しまないで」と言うこと……どれもマイナスでした。無害なのは、「大変でしたね」という言葉くらい、という結果です。相手に対して誠実な関心を持ち、その人が気持ちを表すことができる配慮を行い、そして、そばにいたい。これが近親者を亡くした人の役に立つ、具体的な振舞いであるという結論です。

では、なかなか手ごたえの持てない支え方を続けるには、どうしたらよいのでしょうか。誰かに認められることが必要だと思います。支えを必要とするご本人からの感謝の類は、数年後というような場合も多いようです。支える人どうして支え合ひ、認め合ひるといいのではないかと思います。

人が人を支えるということにおいても、実は一番大切なものは目に見えない(サン||テグジュペリ『星の王子さま』)のかもしれない

ほけんのお話

国内の損害保険会社(以下、「損保」)が会員となつて
いる日本損害保険協会(以下、「協会」)のウェブサイト
2024「日本の損害保険」(<https://www.sompco.or.jp>)が発
行されています。この冊子には、年度別に契約者が支払
った保険料、損保が支払った保険金、損害率、損保の数、代
理店数、従事者数、協会が行っている事業、損害保険の普
及と理解促進、防災や安全対策、関連団体、法律、沿革な
どが記載されています。取り扱う金額、働いている人数も
結構多い大きな業界であることがわかります。

損害保険は生活や事業におけるリスクに備えるため「一
人は万人のために、万人は一人のために」という相互扶助
の精神によって成り立っています。地震や大雨洪水などの
大規模災害、自動車事故との遭遇、火災にあつたとき、損
害保険は大きな役割を發揮してきました。損害保険はや
り社会に必要な事業です。

一方で、過去には保険金の支給もれ、最近のB.M.社事件
に代表される保険金不正請求、情報不正取得や独禁法違反な
ど、大手損保の不祥事が後を絶たず、その度に金融庁から勧
告や指導を受け、再発防止のガイドラインを定める、法律の
改正などを繰り返しています。大手乗合代理店(複数の損保
の商品を取り扱う代理店)を舞台に、複数の損保の営業社員
が代理店に出向し、代理店業務の肩代わりをしつつ不正に情
報を得る、そして契約獲得やシェア獲得のためにしのぎを削
り、時になれ合う、仕事の中身を後回しにしていわゆる売上
を伸ばすことを最優先として動く、そんな光景が目につか
びます。損害保険は社会的に大きな役割
を發揮しているのにこれらの不祥事は
相当違和感があります。

多くの損保営業社員、代理店従事者
は、契約者の意向を大事にして、コン
プライアンスを大事にして保険業に従
事しています。損保の経営トップから
まず社会における立ち位置をしっかり
自覚して、契約者を第一に仕事をして
ほしいものです。



大学文書館へ 行こう

第22回 「展示資料に見る半澤洵の人柄」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



応用菌学教室の半澤洵教授 (1920年前後)

刊行しました。日本で最初の雑草に関する専門書です。

応用菌学に転じ「納豆博士」に

しかし、半澤は研究分野を農芸化学に移すことになりました。当時、札幌農学校は、土壌・肥料・農薬・食品加工などを研究対象とする農芸化学分野の充実を図っていました。その白羽の矢が半澤に立ちます。半澤は農芸化学分野の中でも、食品の発酵・醸造、黴の発生や殺菌などに関する「応用菌学」に専門を定めます。日本では応用菌学はまだ新しい研究分野であったため、半澤は研究の方法や施設の調査から始めなければなりませんでした。

帝国大学農科大学として大学に昇格すると、応用菌学の講義を開始します。一九一一年からはヨーロッパに留学し、微生物や感染症などに関する最先端の研究を進めていたパストゥール研究所に学びます。さらに、各地の研究施設を視察して施設の見取り図を作成し、詳細な報告書をまとめ、帰国後には応用菌学研究室の設計案を作成します。一九一五年、農科大学の「応用菌学講座」創設の中心となり、講座担任教授に就任します。

戦後の食品科学への貢献

戦後、新しい社会の建設に必要な大学・短大の創設が進みます。食品科学・栄養学・家政学などの分野において半澤の広く深い学識が求められ、道内の新設大学から教授、時には学長として招かれました。半澤はこれらの大学で食用植物学、食用微生物学、食物史などの講義を担当しました。そして、八十七歳まで詳細な講義ノートを作成して教壇に立ち続けています。



「帝国北大学半澤博士御研究 学理応用なつと菌使用」と書かれた納豆店看板

現在、大学文書館では、企画展「半澤洵博士の眼鏡に映った世界―植物誌から食物史へ、93年間の観察と探究」を開催しています。半澤家やご親族からご寄贈いただいた貴重な資料を中心に構成しています。簡単に展示のストーリーを紹介します。

植物好きの雑草研究

半澤洵は、一八九一年に札幌農学校予科に入学しました。植物好きであったため、植物図の模写、野草のスケッチ、植物採集を行なっています。一方、札幌農学校で学ぶ植物学分野は、農作物の病害を避けるためにその病原を探る植物病理学が中心でした。一八九七年に本科に入学すると、半澤は宮部金吾教授の下で植物

病理学を専攻します。一九〇一年、卒業論文では、大豆の葉・莖・莢に菌類が寄生して腐っていく「大豆菌核病」をテーマとしました。卒業後、研究生を経て一九〇三年三月に札幌農学校助教教授に就任した時期に半澤が取り組んだのは雑草の研究です。植物への愛好と、農産物に悪影響

を与える雑草の研究という農学校の使命を両ながらに満たす目の付け所が秀逸です。半澤は、雑草の標本を集め、スケッチをし、雑草の定義から伝播、被害、効用、撲滅法、鑑定などを調査し、一九一〇年に著書「雑草学」を



半澤洵が描いた雑草研究のために福寿草 (1905年前後)

容器の工夫、製品ラベルの作成、食べ方の考案・紹介、雑誌「納豆」の発刊など、納豆の普及に努め、「納豆博士」の異名を取りました。納豆の研究以外にも多くの研究業績を残し、一九四一年に北海道帝国大学を停年退官し名誉教授となります。

展示資料を見て印象に残るのは、半澤の徹底した姿勢です。少年期の植物スケッチも、雑草の調査も、留学先の研究施設の見取り図も、納豆研究への取り組みも、戦後の講義ノートも、細かい部分まで専心しています。九十三年の生涯を通じて変わらなかった半澤洵の人柄が見て取れます。

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の4つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■秋の自転車点検会を行いました！

10月21日、22日に第2体育館前で自転車点検会を実施しました！点検は基本的に無料で行い、空気入れや油差し、ブレーキ・チェーンの調整を実施しました。また自身の加入状況を知ってもらいたいと考え、学生総合共済や学生生活110番などの保障制度への加入確認も併せて行いました。

今年は立て看板の設置を始めたことや天候に恵まれたこともあり1日目は120人、2日目は212人の方に参加していただきました！

■10月総代のつどいを開催しました！

10月29日に中央食堂2階にて総代のつどいを開催しました。最初に新メニューの試食会と交流会を行った後に、学生委員会が過去に実施した企画をもとに「防災バッグ体験会」、「健康企画」、「組声返答会」の3つのブース体験を行いました。

試食会では新メニューの味をはじめ各班内の意見交流が盛り上がりつつありました。今回の総代のつどいでは生協への意見交流だけでなく、ブース体験を通して総代同士の交流も深められました。今後も総代の方に継続してもらえそうな企画、新しく総代になりたいと思える企画作りをしていきたいと思っています。

院生委員会

■北部食堂のエリア命名企画を進めています！

7月に開催した「総代のつどい」にて、「北部食堂で友達と合流する際、座席の位置を伝えるのが大変なので、エリアごとに名前をつけてほしい」という意見をいただきました。この意見の実現に向けて動き始めています。

エリア名は北海道にゆかりのある動植物のアイヌ語名とし、アイヌ共生推進本部の先生方にご協力をいただいています。アイヌ民族にルーツを持つ学生・教職員にとつて安心できる環境づくりに貢献することを目指します。また、エリア名を表すイラストは北大美術部 黒百合会さんに制作を依頼しています。1月頃に揭示開始予定です！

■「いんでないかい」制作中です！

新入院生に送付する情報誌「いんでないかい」を制作中です！内容は北海道・札幌の紹介、北大や北大生協、大学院の生活についてなどで、生協の資料請求をしてくださった方にお届けする予定です！2月完成を目指して制作を進めます！

留学生委員会

■ウエルカムパーティーを開催しました

10月に新たに来日した留学生を主に対象としたウエルカムパーティーを、中央食堂2階で開催しました。参加者は、グループで取り組むアクティビティを通じて交流を深め、軽食も振る舞われました。



■東京で開催された全国生協留学生委員会のワークショップに参加してきました

生協留学生委員会が活発に活動している、国内6大学から東京に集まり、ワークショップを開催しました。本学委員会からは2名の学生が参加しました。それぞれの大学での取り組みやノウハウ、課題についてシェアし、解決に向けた取り組みについて話し合いました。



教職員委員会

■教職員総代会会議…10月15・16日、11月12・13日の昼休みにWeb会議により開催しました。10月期の決算報告書、購買店のお弁当やコップパンの発注数、文具の品揃えについてのご意見を頂きました。今後も総代会議でさまざまなテーマでご意見をいただければと思います。引き続きどうぞよろしくお願いたします。

■教職員委員会…10月17日、11月14日定例会議を開催し、きぼうの虹の編集および総代会議での意見について話し合いました。

■「きぼうの虹」…この冊子です。毎回Opinionや特集ページなどで、多くの教職員の方にご寄稿をいただいています。

【編集後記】

新しい年を迎え、気持ちを新たにされていることと思います。一方、年度末の忙しさもあり、慌ただしい時期です。北大生協は2月が年度末となり、次年度に向けた準備を進めています。近年、人手不足や物価高の影響で厳しい経営状況が続く、ご心配・ご迷惑をおかけしております。こうした中でも、組合員の皆さまのより良い生活のために、全国の大学生協の事例を参考に、組合員の皆さまとともに北大生協を運営してまいります。今年から、組合員メリット向上のため食堂で非組合員割増価格を導入します。総代会議や「組合員の声カード」などで、引き続きご意見をお寄せください。本年も北大生協をよろしくお願いたします。